

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2018.10



## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

一一〇一八年十月号（通巻七二五号）

地中海社の命名と作歌の主題

佐久間 晟 15

## 八月号作品批評

A……………近藤芳仙・篠原まり子

田中富子・金近敦子

B……………横田敏子・高津砂千子

C……………柴田登志恵・中島彰代

オリーブ集・松浦楳子・坂上直美

◇今月の二十首詠……アマラブラ

牧 雄彦 2

## 作品[A]

A C B A

市原志郎・小野雅子他

渡辺徳子他 28

和田健二他 56

石田安子他 70

菅野み江他 86

西堤啓子・長谷川瞳他 48

小野節子・高橋光代 16

宇井秀雄 20

久我田鶴子 19

最近の歌誌より

坂上直美

石井悠子 53

福島発・風のたより  
今月の二人・作品評

久我田鶴子 18

## 第一歌集の頃

〔編集部〕

支社・グループ掲示板

（紅風グループ）

高津砂千子

（習志野グループ）

山下雅子 55

磯田ひさ子

報告・夢グループの歌会に参加して

磯田ひさ子 75

## オリーブ集

194

私と短歌との出会い

表3

## 歌壇月旦

54

短歌結社とは  
（責任編集）木村文子

46

## シルクロード・カフェ

（責任編集）木村文子

46

（表紙デザイン）Tazuko Kuga

## アマラプラ

牧 雄彦

昭和十二年生まれ。  
昭和四十九年入会。大阪支社長。  
歌集に「誰もゐぬ部屋」「地の  
沙」がある。

朝霧の漂ふヤンゴン川を航よく小さき渡船の音ひびきあふ  
濁りたる川面を低く飛び交へる鷗か朝日に影を曳きゐる  
渡船場朝をにぎはひ人ごゑの高く響くが街へ向かへり  
岸壁をゆるりと離れて動く船人らの活氣に氣おされるたり  
アマラプラは織物の町この細き通りにけふも機の音せり  
十六年ぶりに訪ひたるこの町の細く曲がれる道は変はらず  
なつかしきアマラプラ織物学校の今も変はらぬたずまひなり  
校庭のビルマネムノキけふもなほ枝をひろげて木蔭つくれり

講義せし教室いまもそのままに空氣変はらず人は變はるに  
いくそたび通ひし道かこの角に日がな座りゐし老いはいづくぞ  
そのかみの女校長をおとなへば白髮は増えておだしく笑まふ  
夕靄に浮かぶパゴダは金色に光りてしづけく空突きて立つ  
ひざまづき心をこめて祈りる人の背に立ちかうべを垂りぬ  
こんなにもとほくの国に送られて無残に死にき十數万の兵は  
幾万の兵や従軍看護婦の多くは餓死とふ言葉うしなふ  
慰靈碑に彫られしあまたのをみなの名従軍看護婦と思へばかなし  
エアワジの流れを遠くに見下ろして戦争のさま思ふゆふぐれ  
夕闇の覆へるマンダレーの街をゆく家路を急ぐ人に混じりて  
この国のやさしき人らに救はれし日本兵また多かりしといふ  
「仕事は?」「忙しいです」若々しきビルマの君の笑顔に会ひぬ

# 作品 A

市 原 志 郎

日常雑感  
・萬

あと僅かの時間と思う庭の花その名を図鑑に探して居たり  
片方の目にて野球を見る為に新しき眼鏡を購いて来ぬ  
鼻水が出ているよと注意される日日淋しや我の生きている日日  
横になることが楽しみと思いおりあとしばらくは我は生きるぞ  
さるすべりの花がいいよ咲き出した今年の夏の早き訪れ  
蝉鳴かぬ今年の夏を淋しみて一日を過ごすベッドの上にて  
世の中を気楽に過ごす人の居て今日のニュースもいつもと同じ

小 野 雅 子

昼 頭  
・羊

万葉の世に美少女に簪へられし昼顔の咲くフェンスを攀ぢて  
朝顔とかつてはいはれ昼顔と今は呼ばるうすべにの花  
遠き日の映画「昼顔」ブリジット・バルドーの眼の暗きかがやき  
草取りに抜くをためらふうす紅の力いっぱい咲く昼顔を  
「あついから元気でね」とのはがき来ぬ一人前のことばに笑ふ  
注文書にあれば買はずに居られないおかひじきとモロヘイヤ  
エジプトの旅おもひ出すモロヘイヤ野外の夕餉ガイドの日本語

朝 井 恭 子

猛暑日  
・森

人影のなき猛暑日の公園を統べて槐の花白く咲く  
猛暑日も高き梢に花かかけ「木偏に鬼」の槐たくまし  
亡き後も夫の表札かかけおきただにむなし歳月流る  
無情なる歳月われを押し流しおぼろおぼろに心たゆたう  
高気温トップニュースのテレビ消し窓辺の風鈴指もて揺らす  
古里の友より届くさくらんぼうギャマンの鉢透かして紅し  
うつすらと紅をさしたる」とき桃供えし仏壇ややに華やぐ

磯 田 ひ さ 子

扇  
・扇

透明の生絹を張りし鹿二匹 奈良の扇の面を走る  
すす竹の骨みつみつと組まれたる奈良の扇のややに大振り  
ほそくほそく半円を刷き春日山 若草山のあなに涼しも  
みつみつし久米の子どもの置土産 奈良の扇の要たしかなり  
采色を抑へる品位 東京を離れたる君のなごりの扇  
奈良を立ち東京に住みふたたびを移りゆきたる人よ尊し  
支へくれし六年まぶしこれの世にわれの最も苦しき時を

市原やよひ

百日紅

・萬

菊地栄子

凌霄花

・湾

夫を子に託し弟のもとに急ぎ来し玉川上水は猛暑日なりき  
会いたしと言われ着きたる病室にかすかに笑める弟が居き  
「もう少し生きられるかな」咳きて瘦せたる白き手をさし出だす  
手を握りたるその冷たき感触をそのまま持ちて帰り来る街  
梅雨明けの報あり水無月の晴天続きに戸惑いおれば  
大き花房揺らせる紅きさるすべり未だ六月街路樹燃え  
梶子を食べ尽くしたる揚羽かも我の前にて少し留まる

大浪美雪

十五年

・森

木村文子

七月上旬

・羊

土地人になれるままに十五年海のものなどいただきながら  
引越の準備いかにと老いびとの籠一杯のモロコシ、トマト  
引越すと告ぐるに子分がなくなると幸枝姉さん怒るかかる  
鶴なら何世代分か針金のハンガーの山洋箪笥より  
電話線はずしパソコンの線抜きぬ孤立の思い一気に深まる  
つばめの子七羽並べりつつがなく渡りてゆけよ我也去りなん  
十五年過ぐしたる町さようなら車窓より見やる緑の山山

奥田陽子

羽ばたき

・羊

菊岡栄子

息子

・漣

身にちかき羽ばたきの音青鷺の飛び立ちゆきてするどき声す  
水を出で羽かわきいカルガモの草の間にまに伏して動かず  
雲白く樹樹揺らめる六月の池に一羽の鴨もみえざり  
いたずらの証左となれる桑の実の赤きが着きし指もて帰る  
まっすぐに絵本差し出すちさき児のもの言わづいてわが眼みつむる  
見知らざるちさき児に絵本読みておりその母を待つしばらくの間を  
盛りなる花さえ刈りて跡もなし除草業者の去りたるのちは

ときめきは憧れならん沿線の樹木も草も燃ゆるさみどり  
電線に番の鳩は動かざりはや明け易き水無月の空  
重かった腰が健気に動き出す姉と妹と集う日來たる  
閉店後灯し居残る人の見え甥のしのばる眼鏡店前  
息切れ歩みの止まる坂の道凌霄花はひたすら紅く  
ツーリングしながら路上に物を書く若者よ錢乞う器を置きて  
振幅する胸の鼓動はありありとフジコ・ヘミングのラ・カンパネラ

木村文子

七月上旬

・羊

紫陽花のみどりの球がほどけゆき金魚模様のうちわが届く  
壊されてゆく古い家花の庭 ビルの建つまで光あふれて  
夕暮れは秋のようなり雨多くとっくりを着て名古屋場所を見る  
地の乾く間のなきひと月ぐすぐずと野菜の子らは伸びにくからう  
七月の半ばのしんと薄寒く紫陽花小さく風に揺れいる  
日傘にも寿命があると知った日に山なす紙の資源ゴミを出す  
若葉マーク律儀につけた「宇治園」の軽自動車が右へと曲がる  
終戦の年の七月十九日暑い最中にわれは生まるるよ  
殊更に気温の高きと思えども夕べに下がることの危うき

草刈十郎 紫陽花

・世

河野繁子 被災地

・雁

広びると光る海にも母にも母の字のありけふは母の日  
ながながと続ける蟻の行列のすぐに崩れる雨となりたり  
さはやかな風渡り來てひるがへるたびに光となる若葉かな  
庭隅にいまを盛りの紫陽花の雨の葉裏へ返すで虫  
白に染まる日本の夏を思ひつつ白一色の更衣なり

つばくらの駅となりたる無人駅ただ廃駅とならぬを願ふ  
末つ子のままに老いを思ひつつ飛行機雲の行方見てをり

国井節子

高山植物園

・春

小西美智子

われに背を

・大

ふる里というを持たざる疎開児の終の住処に野草と暮らす  
四国よりもらい来しとう九蓋草またも別れて穂花むらさき  
かなしみを神に預けて今朝の涼キツネノカミソリさ庭にひらく  
水害に逢わず暑いと萎える日々手助けならぬ被災地おもう  
打ち水に誘われ涼とるオニヤンマ穩しくあれば被災地おもう  
日本も他國も危険な暑さを報じ弱きは人間拱くばかり  
ゆうづつと三日月近づき文月の夜豪雨被害の地を俯瞰する

白山を一望出来る西山にまだ新しき植物園オーブンす  
高山の植物ばかり十万株 絶滅回避のために移植す  
それぞれの花の性格調べたり村の人らは植物学者  
草を食む鹿より花を守るために時には猟銃撃したねばならず  
絶滅の危惧種も種から育てしとボランティアの老が指さす  
一面に黄に咲きほこるニッコウキスゲこの地に馴じみ元気に育つ  
芦原の水湧くところ孵化したる森青蛙の稚魚等の学校

小泉泰清

忽然と

・う

小林能子

「トレース」

・羊

患はず忽然として逝きたるは悲しみを越え羨しくなりぬ  
昨日まで元気でありしも忽然と夫君身籠り呆氣なからん  
長患ひ看取りしゆゑの深き情湧き得ぬうちに逝きし悲しも  
猛暑ゆゑ呆々として過ごす日び台風迫るに寂然となる  
九十九里の磯打つ波の轟きが八キロ離るるわが家に滲む  
成人となりし内孫三人が家をはなれて電話希なり  
息子よりメール介せし孫たちの消息を聞く隔靴搔痒

今が何時と判りて居るや電話あり ハネダにいますアンタいきます  
接染のわざ究めんと西ジャワより日本の北陸までの道程のちの  
実習に行く若者が五週間まなびし七百六十三語の日本語  
教室を出れば受付も食堂も研修センターの日本語生活  
元研修生と辿る思ひ出その中に沖縄からのひとりも居たり  
石油ショックが職人技の「トレース」を霧の峠も越えて襲ひき  
日本は如何してこんなに暑いかと四十六年ぶりの挨拶

近藤栄昭

日光きすげ

・福

坂出裕子

夕映え

・洛

沼山の下りはゆるき等高線きすげはもうすぐ地図を辿れば  
標高を車で稼ぐ尾瀬御池山杖忘る心にすき間  
沼山の冷氣を胸に靴を履く暗き林の誘い見つ  
取つ付きより木道となる山道の幅は規格に角度は心拍  
岳樺一本が隣る道のそば抱き樺という連れは楽しげ  
きすげの黄花びら揃い山支え花のお山は天空に浮く  
長蔵氏の選び眼れる尾瀬沼か日光きすげを蓮台として

近藤芳仙

茂吉の山形

・信

新幹線分歧して入る山形の茂吉の故里へけふは近づく  
あくがれの茂吉の歌にはじまりを馬酔木に見つ記念館まで  
リニューアルオープン間なき記念館入れば茂吉の声の流れる  
映像に映る茂吉を観てをれば急に親しきわたくしこども  
陸奥をふたわけざまにと詠む茂吉 歌碑は伝王を見はるかし立つ  
最上川の豊けき水の船絆に「逆白波」の茂吉を想ふ  
最上川を舟にゆきつ聞く訛 茂吉の母もかく言ひるしか

坂上直美

火星大接近

・天

佐藤道子

放射能

・甲

赫々と南の空に輝きて我が許に来よと呼ばわる火星  
火星人ある日窓より空を見てふと見つけたり青く輝る星  
人類はかつて火星にいたりしが砂漠となりて宙に出でけり  
地の底に湖ありてその岸辺人住みいるか遠き火の星  
炎熱に干涸びてゆくこの地球 海とうものの神話となるか  
近づきてまた遠ざかる火の星にいつかは我ら住むことにならん  
赤く輝る火の星南の空にあり我らに何を伝えんとする

ゆふぐれの空の茜をいつまでも見てをり二度と会ふことのなき  
ひとつ生にひとたび出会いふ今日の日の夕焼け雲を立ちて見送る  
時さまに色うつりゆく夕雲のあかねのひかりたまものとして  
見過ぐして来しもの多し夕映えのあかねのひかりつかのまに消ゆ  
今日の日を燃ゆる夕ぐも窓に手をかけたるままに立ちつくしをり  
行くことのものはやなけれどふるさとの祭りと聞けばこころはなやぐ  
大いなる幸に出会へることちして夕ばえの雲 映すこころに  
佐久間景

佐久間景

日乗(一五)

・清

為すことも知らずに今日を生きている天災・ミサイルそして年齢  
咲きたくも咲けぬわけある人を知り己れひとりの奢り慎む  
更にお純白を求め今朝咲きし薔薇の花の白に寄り行く  
この辺で歌作りも止めんかと思えど湧き来る歌の数々  
あの人もこの人も皆われの友寄りくる笑顔のままに美し  
幾たりの親しき友はすでに無し涼しき声にわれを呼ぶかも  
いましばしお待ちくだされ異界の友よわれを恃める人まだ多く  
昨夜の雨道辺に散り敷く白き花アベリア垣の今朝は匂はず  
真中に糞の転がる散歩道先客猪すでにゆきしか  
香雪の杜弓弦羽の杜とつづく道朽葉の匂ひ雨に立ちくる  
まるき糞一列にある朝の道子連れ猪通りたるらし  
猪とすれ違ひたることありき互にそ知らぬ顔で歩みし  
この町の猪争ふことなして巡回のバイクに添ひて走りき  
放射能隠蔽すれど消えはせず熊も狂へば今は恐ろし

## 椎名恒治

日常寸吟

・橋

## 閔根榮子 水害

・埼

朝早く窓を開くや蟬の声表通りの並木より湧く  
降り立ちて歩道の片隅杖突きてしばらく歩みすぐ戻りくる

昨日は街樹に鳴きてるたりし蟬なりや死骸一つころがりゆきぬ  
台風の高湊襲ひたる高層のかのホテル曾て泊りし或る夏ありき  
その夜半の海の上まるると昇りたる大ヶ月仰きたりき  
熱海市の海水浴場は九十九里浜の砂を運び来たりつといふ  
ここに九十九里浜を運びしは奇想天外なる発想ならずや

## 鈴木結志

星の玉章

・福

もしかしておもかげびとの来るような藍色深む桔梗の花  
毒だみの白十字花を瓶に活け今宵灯のもと詩情にひたる  
たきちはしぶき虹織るせせらきの君の声かと思う水音  
逢瀬川せぜの川波月光に青くさやけみ小躍り止まず  
盈盈の水に映りて天の川君の玉章づらぬ明かるむ  
うたなれば一気呵成は夢にして紡ぐ表現魂込めて練る  
鬱の字を書けて胸暗れ身をもって己がすこやかあらためて知る

## 世木田照比古

西日本豪雨

・茜

未曾有なる降雨続きて故郷の団地の一つが土砂に埋まりぬ  
行方不明十一名が死者の名に昨日も今日も変りゆくなり  
報道に町名出れば確認の電話を交わす災害のあと  
道路網はずたずたとなり術もなし焦燥の中に今日も暮れたり  
七日振りに高速道が復旧し物流絶たれし恐怖感去る  
雨止めば次なる試練懸命なスコップの人に及ぶ灼熱  
床下の泥搔く若きボランティアその只管に頭を下げる

抽斗にちびた鉛筆ため込んで速き記憶の辻褄あわす  
サイドボードの奥に畳んだジヨニ黒が父の記憶を永遠にする  
しかられて祖母の蒲團にもぐりこむ黒い膏薬貼った手ぬくし  
たまさかに父の遺影に手を合わせたた十年されど十年  
ボケットに古きハモニカしのばせた父の涙をついぞ見ざりき  
振りかえる日はいつも晴れ後ろから母のスカートひっぱっている  
白木槿ふたつ咲きたる新しき朝よ臆病な風ふきとばす

暑き暑き地球脱出の未来図に月には水火星に水あるとう  
不用不休もうわれになし外出を控えよと放送の猛暑日をこもる  
夕暮れに涼風の立つはもう昔縁台涼みは死語となりたる  
剪定を忘れていたり夏のバラ小さく小さく咲き出す哀れ  
冷房に閉め切りの窓を開ける夜月に火星の最も近く  
樹や土砂を巻き込みながらさまざまと水害の恐怖を写しいる画面  
みはるかす湖なりし利根川の決壊の記憶は十歳のとき

## 閔根和美

羅漢果

・埼

サヨナラとわれは言えざり戻らざる意識と聞くも奇跡信じて  
祈り祈り祈りし果てに与えらる死は天命と知るほかなきか  
還暦をまた召されし郭秀娟かたことの日本語笑顔のうかぶ  
子の婚を整うるため春節に訪いしはわずか三年ほどまえ  
副葬の品は紙製自家用車家電にケータイ札束もあり  
火を拒む棺納むる深圳の海辺の墓地より香港の見ゆ  
身を案じ送りくれにし羅漢果のまろき茶色がころがり出でつ

## 高尾恭子

記憶

・大

高津砂千子 豪雨

・風

竹下妙子 夏深し

夏深し

霧

夜を通し豪雨のニュースに聞き入りぬいた帰らぬ知らせを受けて  
どの道も通行止めとなりしゆえ風呂屋の庭に夜を明かせりと  
朝食を出してくれたる風呂屋さん的心忘れずという声うるむ  
「晴れの国岡山」の地が映りたり濁流のなかどっぷり浸かり  
断水のニュースに水を送らんとあたふたせしが車両通れず  
井戸がある されど断水つらからう十一日目に解除の江田島  
ほたる狩りに行きしは杳き日のことぞかの人の無事ただ祈るのみ

高橋和代 歌材(二) 桃

病み籠る身には新たに目に止まるもの無しまして聞くこともなし  
亡夫の忌の娘ら待てるがに熱高く法要の席 居づらかりし  
病むわれの独り住まひを危ぶみて入院しきりに勧めて帰りし  
「勧めても嫌がるので」と娘ら医師に「その折には」と特に願ひるし  
病み進むのはいつまでぞ哀れる短歌はもはや詠みたく無くも  
自叙伝の父の短歌に魅せられて作り初めし我流なりしが  
教育者としての戦前 戦中の心情の歌「あとがき」に有りし

滝田靖子 余命 新

余命あと一ヶ月と告げられてより君は笑はぬひとりとなりぬ  
余命など誰が決めるにあらぬものを笑顔奪ひひとりを憎む  
笑はない話さないまま余命といふ一週間を君は生きたり  
過程こそが重要だといふその過程とは抗癌剤に苦しむ日々のこと  
苦しみて死ぬを哀れと思ふならどうか治療を止めてください  
どうやつて生きればいいのかどうやつて死ねばいいのか誰も知らない  
紫のあぢさる風に揺れてゐる君は成仏したのだらうか

西日本災害豪雨怒号せり人智すべなく微塵となして  
親や子を何処を探し求めゆく火を吐く人々に心凍てつく  
泰山木の空に伸びたる尖端に花開きゆくらふたけき白  
鉢植ゑに育ちてみどり淡あはと小さく淋し鈴蘭の花  
さるすべり剪枝されしが咲き返る夏逝かむ日のためらひのこと  
暮れなづむ草原の辺に佇みて草そよぐのみのひそけさにをり  
わが手足思ひ放たれ眠る夜の小暗き庭の薔はからまる

田土成彦 空白 宙

夜覚めて読みし歴史本空白の四世紀起きてみれば空白  
アマテラスが男神でありしいにしへにはろばろとして心遊ばす  
火炎紋土器と歌舞伎の限取りと繋ぎて来しやその遺伝子を  
熱中症対策として水アラス塩分のことやうやくに言ふ  
よき獲物得たるか家守の白き腹ひくひくとして夜のたくるらし  
まばたきをしておぼき蛾を呑み込めるあの蛙のすましたる顔  
虹色の尾が石塊に隠れたり異界にわれをいざなふやうに

田土才恵 蛍 宙

村境関所のごとく人立ちて螢舞う里篤く守れる  
西山に三日月消えて蛍のショーいよいよ始まる紀州鞆瀬ともよせ  
掌から掌へ移してしばし冷光を放つ螢の点滅を抱く  
露しど野辺の草生を濡らしてこの谷川の夜は更けてゆく  
部屋内に飛べる螢のはかなさの胸の奥處を離れてゆかず  
二人して修学旅行のようといい少女ながら眠りにつけり  
清流の下れる谷に明日は飛ぶほたる眠らんせせらぎ聞きつ

玉井綾子 金魚すくい

・羊

中島義雄 一日の命

・岡

・岡

区報にて開催を知る金魚すくいエアコン完備の会議室内  
順番で腰かけて待つ金魚すくいコツ見えぬまま「ポイ」渡される  
蛍光灯の下、事務的な係員 金魚も白けてポイになびかぬ  
飼い方を配布しキットを販売し金魚すくいに見える区の意気  
夜店では今は見られぬ金魚すくい育てる覚悟はポイで掬えぬ  
中和剤、バクテリア剤、ポンプ、エサ 生き物愛を測る価格差  
それぞれが朝水槽をのぞき込む金魚が家族となりたる文月

虎谷信子 生命 伴

・銀

死刑者のすらりと載る 新聞。そして坂本さん一家の写真が。ああ  
人間が人間を さばかねばならぬ きびしさが。今度は女性の法相  
真夜中にがうがう台風荒れてすぐ。まんじりともせず一夜となりぬ  
地震にて傷みし 土壠なほし終へ、台風のわざはひには 耐へしか  
つぱくらめ 軒ばに巣づくりせし頃よ 思ひおこせば 小さき生命  
庭木樹に鳴く 蝉の声弱弱し。猛暑のせむか 何かが狂ふ  
八朔を祝ぐ 習慣のすたれしも。京の花街にのこるとぞ 知る

中島央子 わさび

・森

萩葉子 長茶筅

・銀

「九十一歳にしては」と珍獻のことく言ひ医師の診療は五分で終はる  
九十を過ぎれば一も二も同じ生きるを不思議のことく医師言ふ  
立ち暗みしつつ仰げば中空を今日もドクターへりがゆくなり  
「命の危険」有りとふ暑熱に身を置きて一日終はれば一日の命  
共どもに至りし老いを嘲ひつつ友の葬儀に立つ二三人  
白桃を丸齧りせし口拭ふ夏を越ゆるにまだ一ヶ月  
庭草の二坪ほどを取りしこと手柄のごとく夕餉に座る

永塚節子 土偶

・銀

身を細めタイムカプセルくぐり抜け絹文人の輪のかたわらへ  
ちろちろと燃える棺へ手をかさし絹文人の話聴きおり  
小さな土偶ひたすら祈りおりまなこ見開き口を尖らせ  
絹文のビーナスというこの土偶再びまみえる至福の時間  
どっしりと両脚ふんばる女神なり仮面の奥に何を隠すや  
コンクリートのジャングル忘れ絹文のこわれそくな土器に温まる  
国宝の五体の土偶並び立ち行きては戻り倦くこと知らず

ときれたる雲のあはひに雪のこる常念岳の見ゆるときの間  
わき水の二つをつなぐ流れあり山葵の育つ水の冷たさ  
川いつばい覆へる黒き寒冷紗なつの日差しに山葵田まもる  
きしみつつ回れる水車を点景に安曇野のなつ蓼川の夏  
見逃してしまひさうなる碑に安曇野わさびの開拓史あり  
百年のむかし拓きし汗・涙「わさび」は世界の言葉となりぬ  
湧水のながれの岸にオハグロのトンボは愛を遂げただらうか

博物館にてすすめられた長茶筅「マグカップでも点てられますよ」  
野の友になるかも知れぬ長茶筅 茶筅置きなる付属もありて  
踝が疼きはじめた雨模様ブルーの折り紙選りて鶴折る  
歯科医院の四番の椅子目の前にブーケの絵あり抜歯予約日  
緑道の草がすっかり刈られて三十七度が幾分涼しい  
物忘れ多いといえば隣席の友は頷くバスに乗り合い  
北上の台風十三号ノロノロと足ぶみしている駄々っ子のように

## 白子れい

庭の花ばな

・洛

## 浜本 芙 美 球 児

・夢

あさ朝を神仏五か所のお詣りをすませみどりの界にて体操  
土砂降りに音たて濁流ながれいし渓川の水今朝は涼やか

水やりの時間持たねば降る雨をしつかりお飲みとわが家の樹々に  
雨水を吸いてひらけり紅芙蓉あじさい木槿夾竹桃の

今年また夾竹桃に甦りくる師のお姿がじいんじいんが  
声惜しみ啼く老鶯を追いたてシャンシャンシャンと蟬のかしまし

訪ねゆく父はははの亡く訪いくる子なき日々彩る庭の花ばな

## ばばりょうこ

まあだだよ

・鹿

## 檜垣美保子

・空

「まあだだよ」店は準備中らし客ふたりがっかりさせて立ち止まらせる  
もういいかい まあだだよつたら まあだだよ スーパーの匂いで誘惑しながら

「もういいよ」いちばん乗りは親子づれ もういいよとはしゃぎながらの  
うどんやのユニークなこのネーミング道ゆく人は横目でくすり  
うどんやの遊び言葉がうれしくてついと入りぬ炎天さなか  
目的はうどん度外視この店主をかいまみたいがために  
もういいかい まあだだよ もういいよ 遊び心にくすぐられちゃった

## 浜谷久子

酷暑

・地

## 福田庸子

湖面の風

・今

枯れながら赤く実熟らすミニトマト大雨ののち続く炎天  
畑中を走るかモグラ土を盛り西瓜の茂みをばたりと枯らす

ラズベリー、ブラックベリーの不作年ブルーベリーを摘む手の彈む  
赤オクラ一本生えて異色顔樹の様相をすでに備えて

曲がり出す胡瓜の寿命水不足新生苗の伸びのよろよろ

紫蘇トマト苦瓜胡瓜ミキサーにかけてこの日の色を飲み干す  
酷暑との闘いここにも隼人瓜晩夏に向けて繁らせる蔓

薔薇の芯立ち伸びる日々にして思いは一つに凝りておりぬ

一点もどれぬ球児を応援す慷慨の守備のまた球おとす

負の方へ傾りがちなるこの思い断たんと青空へ双手を広ぐ

あきにれの上枝かすむは新葉の萌えか微かに息づききこゆ

思ひがけぬ所にムスカリのひと花の陽気にむすむす狂い咲きしか  
暖房を止めんと照明用のリモコンを握りて部屋にひとり苦笑す  
少し痴呆のかかりし義姉をあやすように短気な夫の対応している

藤川和子 リース会社

・眉

船田清子 朱星

・天

磨き込み拭きこみ光る古座敷まるぶ空蟬もう誰も居ぬ  
屋敷内囲ふ四棟取り壊し離農の実家はリース会社に  
二町歩の放置農地は草茫々祖祖の営み繼がぬ次世代  
防風の櫻あら柏勢ひたち熊蟬のこゑ、とほき耳鳴り  
宇宙にも龍宮在りてはやぶさツー着地ねらひて廻り続ける  
光岳の登山道わきに毒草どつきり真赤な木の子が三本  
北アルプス白山チドリは雪上に 高嶺の花はながめるものなり

藤森巳行 めぐりの森 銀

・銀

菊の花嫌ひと言つてた君のため色花多い祭壇にする  
「方便もて涅槃を現はす」法華經の文を信じて貴女を送る  
白ゆりと胡蝶蘭を額に添へてあなたに別れを告げる  
川口に火葬場出来る利用料市民は一体三万円也  
めぐりの森とふ火葬場に三世生命のめぐりを思ふ  
静寂の中に草とる人々の姿が動く火葬場の庭  
この頃は昔を思ふこと多し俺にも迎へが来るかも知れぬ

藤田美智子 尻尾 新

・新

ほほほほと紅やさしきに早朝の雨に西施がねむの花なる  
大雨二日明けて朝日にジジ・ジリー「あゝ初蟬?」声の幼く  
抜け出でし翅乾かぬや産声の整はずして低きよりたつ  
三日経て樹上にはやも競ふ蟬大合唱に沸くこの酷暑  
たまはりし友が菜園の王ねきの切れば目に沁む香の嬉しもよ  
なげくがに諭すがに照る南天の朱星一つ太古より明日へ  
「日本紀」の建国の条に「よくもの言ひ順はざりしはこの星神」と  
牧雄彦 愛宕山・夕暮

・大

見下ろせる急ななりに真直ぐ立つ大杉の幹を風が撫でゆく  
時折はちと鳴く鳥木から木へそしてかすかな風の音のみ  
愛宕山はや夕づきて山道に会ふ人すでに絶えて久しき  
二十五丁目けふはここまで夕暮れて魑魅魍魎の気配せぬ間に  
とほき日に一人でかかる山道を行きことあり下りつつ思ふ  
その記憶いまもなづきの隅にありたしかに山のこゑ聞きしこと  
膝の痛みかばひてゆるりと下る道木の間がくれに小さき灯の見ゆ

松浦禎子 運慶展 羊

俳句の授業の案を立てむと2Bの鉛筆三本を卓に揃へる  
出すはずちやなかつた尻尾出てしまひ人間たちに振つてみたりす  
夕闇がとつぶりわれを包みゆき「もういいかい」と目隠しとれば  
雲に雲が重なりながら流れゆく消せる記憶のあるかもしれない  
いらだちをぶつけることのできぬままぎつりと飯を盛りて渡せり  
萎められたき思ひの強さを見抜かれて日本酒一合に酔つたふりをす  
「マチネの終わりに」を読み終へしのち辛口の白のワインを時かけて飲む

松 永 智 子

箇

・嵐

三 好 聖 三 雜

・伊

・伊

しづもれる箇の昼の陰ふかし風ありてはや夏のゆく音  
木のみどりときにし播れて音のなく人のかけなく昼の日ざかり  
川の辺のまひるあかるし一本の柳のみどり風のままなる  
ふりむくに影あははし人のゆく月高き夜の箇に音なく  
この夜の月みてあればしづかなりたがふことなく高くなりたり  
月の夜の影おぼろなりとほくして蒼くして人ひとりゆくみゆ  
ものおとの絶えしどきのまはるかなる人の声らし月たかき夜半

三 浦 好 博

理不尽

・銚

御 代 田 澄 江

夏来れば

・埼

理不尽はここにもありて虐待死の零才零ヶ月零日目

駅を出る女人の日傘次々と羽化とげてゆく梅雨明けの昼  
あの人はどうらによける同じ側によける気がするこの狭き道

ケータイを万歩計となし幾時間卵のやうに温めてをり

草刈りの前に摘みたる振花の左巻き五本右巻き八本  
湧水に引き込まれつ咲く白の梅花藻は風を知りたいといふ

寥川の水を光に変換し水車の描く七色の夢

宮 本 靖 彦

熱帯化

・凌

茂 木 煎

山清水

・埼

熱帯日紅きカンナのギラギラと戯禍の跡に忘れ得ぬ花

猛暑下に街を歩めば熊蟬の落ちてきたるを幹に上げやる  
鬼やんま一匹しづかに街をとぶ三十八度の熱こもる夕

台風雨に硬さゆるびし我が庭の荒草をひく猛暑の隙き間  
蒼空に浮かぶ白雲黃金色に曼陀羅模様 台風芸術

温暖化対策貧しく熱帯化トランプ付度科学界にも  
熱き夜の葉蔭もれくる小夜風のやさしさに読む『平城譜歌』

夏来れば終戦前後の食糧難共に育ちし兄弟姉妹思ふ  
亡き父母の熱き勞苦に生き延びし生命ぞ今朝見ぬ恋母の夢  
母が居り娘も居りぬ時空超え吾が器の飯を分かつ喜び  
東海原発ゆ5・3キロの土地に住み安定期ヨウ素剤の更新を受く  
弛まる平和の希求夏来れば我が市行なふ平和展平和行進  
幾重にも曲りつつ並ぶその先の「人体」展見ぬ脳神經呼吸総体  
神秘なる巨大ネットワークの人体の秘密解体ああ生きてるる

生れしより廻る寿命のルーレット願はくば百歳まで廻り続けよ  
赤提灯「あかつみとう」と遊び読み氣づかずしばし考へてバカ  
吉野屋で「並ください」と注文し自らのこと食めるがごとし  
公園のトイレを借りたお返しに捨て置かれたる空き缶拾ふ  
七月二十日過ぎてほんとの梅雨明けだみんみん蟬が生まれた鳴いた  
草取りの鎌が蟬の巣搔き暴き蟬ん子たちは朝のパニック  
山清水両手に受けて冷たさを汗の躰に零さじと飲む

食はそくなりたる猫が家を出るあたかも死へとおもむくよう沖縄へ人が渡りしこれのこと読みつあれば驟雨落ちくる  
昨日まで餌を食らいし猫の子が今日の草むらに固くなりいる  
悪党は悪党らしくせよと言う然なり然なりと肯いながら

暗殺者サビース・モローがあっけなく殺されたれば寂しくもある  
野垂れ死にはみじめな死だと誰か言う然なり然なりと肯わざ居る  
加枝さんの「のんびりすむ」に肖れば少しあまともな性になるかと

もとむらしげと

淹めぐり

・そ

横田敏子

海開き

・福

滝音のしだいに高くなりゆけば梢を渡り冷氣降り来る  
山蔭に現れしひとき瀑布とう美しい言葉を胸に浮かべぬ  
次々と流れ落ちくる水量を湛える頂のむこうは見えず  
現れて落ちゆくのみの滝の水無念放下の心なるべし  
四匹の白龍を呑む滝壺にかすかぎりなき蜻蛉舞いおり  
頂にあらわれてより滝壺に呑まるまでの水のきらめき  
岩肌にぶつかりながら落下する水の痛みを思っていたり

八乙女由朗

平成の末

・柴

吉内尚彦

黄昏

・浜

省みぬ性にしあれば何も無し気流動きて人かさね逝く  
人権のあらぬ時代に僧となり悟らぬままに「東堂」となる  
あれこれと頭に浮かべども春行きて夏来にけらし今日の夕暮  
クーラーの真向かう座なり咳すれば止めなくして行く手もあらず  
三十度越えくる日日が普通にて二十七度は眩暈が誘う  
蟬鳴かぬ年にしあれば蟬も蚊も世に出でざりき平成の末  
夜更けて灯りけわしき老人施設一夜一夜をこだわりている

山下雅子

百日紅

・智

吉永惟昭

妻の被爆日

・熊

八年目を迎えてようやく海開き 一年生は震災を知らず  
歯切れ良くパリパリ独活を食むことも無くて今年の春を送りぬ  
住み心地さぞ良からんと眺めいる今朝のチラシの豪華なマンション  
免許証更新のたび撮る写真いつものわれと違って見えぬ  
ひんやりと冷えたる桃を頬張れば極楽極楽この美味しさは  
クーラーのほど良きホテルのレストランちょっとめかしてアルグレーを  
外出れば瞬時に心の乾く午後膳の干物になりそうにわれ

義姉見舞う梅雨のけやきの杜の奥の特別養護老人ホーム  
入居者ら幾十人が一室に憩える部屋に案内されたり  
集えども誰も語らず一室は音なく過ぎる要介護の人ら  
現代の姥捨て山はここにあり特別養護老人ホーム  
介護職ここも不足か「花水木一一二丁目」を走りまわれる  
あれこれと妻が整理をする個室義姉の部屋に黄昏せまる  
ハンドルを握り得るのも後わずか助手席に居て妻の手を見る

熱中症猛暑にかまけ無為に過ぎ夕べ鋭き三日月仰ぐ  
平成にめぐる終なる八月の六日九日十五日重し  
祖国敗れ巷に「りん」の歌あふれ征きしままなる父を思いき  
仏糸華カナン梯姑は赤々と沖縄戦のかなしみ纏う  
書き掛けの心残りをそのままに平成の一ひと日からも過ぎゆく  
ふっさりとくれない豊けき百日紅炎暑の空に泰然と映ゆ  
ひよんなことにQ-Bや付度を知る晩年の日々なりむなし

久我田鶴子 尾瀬

・羊

## 地中海社の命名と作歌の主題

佐久間 晟

こつこくと変はるゆふべの雲の色レンズにとらへ眼をつむる  
朝はいい しつとり草の冷えはあり素直な声の生まるるけはひ  
朝霧の尾が逃げてゆく草はらにおはやう金のひかりを撒けり  
沼に出てかいつぶりのこゑ汗のひくまでを木陰に休みてゆかむ  
ちひさなる池塘につぼみ二つ三つ未の刻を待つひそやかさ  
わたくしはもはや巨大な汗なれば 諾、諾、諾、したたるのみに  
おほかたは水でできる人体は噴き出すものを拭ひもあへず

（ミユーズ・コーポレーション）定価一〇〇〇円

### ●「現代歌人—出会いのひとこま」 高瀬隆和著

平成二十年に亡くなった著者が生前「炸」に連載していたものを松坂弘氏が一冊にまとめて公刊。一〇一三年四月一日発行。

十四人の歌人が取り上げられていて、その中に小野茂樹も。岸上大作の『意志表示』帯文を小野が書いたという。その帶文「著者を愛するも憎むも自由だ。が、激動期を再び迎えつつあるいま、この作品集をよんでもなお、傍観者たる得るものはないだろう。」著者は最後に、「岸上大作、坂田博義等の夭折歌への美しい追悼文を書き、去っていつた小野の早世が何と言つても惜しまれる」と書いている。

十四人目に取り上げられた沢口英美さんについては、書き起こしたところで中断。その死によつて終わりまで書かれることはなかつた。

### 一、成立

昭和二十六年、夕暮の没後、「詩歌」は子息の透氏が後継者となつた為、香川進らの重鎮は「詩歌」を去り、独立することになった。新生「詩歌」の安定するのを確認し、昭和二十八年五月、親友の山本友一（「国民文学」松村英一）や千勝重次（「鳥船」秋道空）と共同して、新結社を設立することになった。

### 二、命名

命名に当たつては、香川・山本・千勝のほか、香川家に寄寓していた画家の田中岑も加わつた。（中略）種々検討の末、異系統三者の新結社ゆえ、それは「地中海文化」に似てゐることで「地中海」に決つた。即ち、北からはヨーロッパ文化が南下し、南からはエジプト文化が北上し、東からはギリシャ文化が西進し、地中海といふ海で融合し、そこに「地中海文化」が形成された。

### 三、作歌の主題

作歌の中心主題は、「生の意義を探る」である。

生きるとはどういうことか、なぜ生きるのか、生きて何をするのかなど、生きるということを根本理念に置いた歌を作ること。これが「地中海」の作歌の根本テーマである。

（第66回地中海全国大会班別歌会における配付資料より）

## 七十歳半ば

小野 節子

二重人格

男気のありたる父の若き日を夫に重ねし青春時代

「早いね」と言われし父の死六十三歳私はその齡十年過ぎぬ  
外出多き父に替りて家の事必死でまもりし母思う今

父が好き母が苦手と思いしが年経ることに近づく心

その日まで母の慕いし父のこと女の業みせ狂いし時も

好き嫌い人の好みもそれぞれに嫌いと言わず苦手と言えり

人を知り教わることの多くありわれがわれがの若かりし頃

朝の路地車ゆっくり走らせる姫一人の猫と住む家

庭もあり納屋もありたる農家らし車庫から車の消えて久しい

早朝の大空西へとヘリ数機いずこの被災地目指して飛ぶや

被災地へ行き交うヘリの爆音の力強さが響く身の内

いつよりか黒き揚羽の休みたる庭の花にも雨降りしきる

過去おもうことなどあまり無かりしに七十歳半ばの青きかけろう

昔、血液型による性格判断が流行った時があり、今でもその傾向は続いているように思います。その時、知人から血液型を聞かれ、「A型」と答えると、即座に「二重人格ね」と言われ、何とも表現し難い嫌な思いが身内をよぎった記憶があります。後に、流行歌の文句にあると知りましたが、その時は、二重人格の代名詞のような『ジキル博士とハイド氏』の小説のように、悪い人格の方が勝るという印象が強く、私自身の人間性を否定されたような気持になつたのでしょう。しかし、近頃は「多重人格」と開き直っています。

振り返れば、長いようで短い人生、我が儘で利己的な性格とは逆に、相手に迎合しようとする性格、これが二重人格と言われる所以なのかもしれません、一期一会の巡り合いの中で、多くの人々に教えられ、導かれて今日の私があるのだと思います。短歌にも出会い、歌の中にその人の人生を知り、命の儂さも知りました。たとえ、文字に残さなくとも、脳裏に染み付いた五七五七を楽しみながら、失われてゆくであろう人としての人格を少しでも長く保つてゆけたらと願っている私です。

## 山里暮らし

高橋 光代

山里に暮らして

見たこと、聞いたこと、感じたことを何

野の花は季節違はず花咲かす酷寒の中にすみれ咲きいる  
あわあわと梢に咲きたる栗の花夕闇の中白く浮き立つ  
春陽浴び烟に野菜の世話をする世の憂さ忘れ安らぐ刻なり  
春風に揺れいる藤の花房は若葉の山に彩り添える

初夏の夕昇り来る月待つ庭に忍冬の香風に乗り来る

数多咲く山百合友に写メールす庭に漂う香も届けたし  
容赦なくはびこる草に負けるなと野菜に言うか己に言うか  
秋長けて梢に残る柿の実の色濃き一つ風にさからう

行く秋に淡きピンクの花咲かせ枯れ野彩る犬蓼の花

ごめんねと言えず黙する鄙の家外はしんしん雪降りしきる  
胸の中に昨夜の諍い仕舞いこみ抹茶を点てて夫にすすめる  
種まきを終えて寛ぐ昼下がり秋の収穫語り合いつつ

穫り入れを終えて農具を磨き上げし夫に今宵は特上焼酎

の技巧もせず三十一文字で表す、これが私の作品です。果たして短歌といえるのかどうかわかりません。地中海の渚社の山口卓之先生や大山短歌クラブの佐久間ミツ子先生にもいろいろご指導いただくのですが、理解力不足でなかなか上達出来ません。

私の住んでいる大山は、山に囲まれ棚田の多い山里です。ここに夫と二人僅かな田畠を耕して暮らしています。里を囲む山々は春は若葉、夏は深い緑、秋は紅葉と四季折々に姿を変えます。また、一年を通し野の花々が咲き継ぎ野面を彩ります。野道を歩きながら見つけた花や畠仕事の合間に腰を伸ばして見る山々、これが私の作品の主な題材です。

私は野に咲く花々を愛で、庭に遊ぶ雀、鶴、山で鳴く鶯、杜鵑などの小鳥たちの愛しさをまた四季折々の山里の美しい景色を畠に野菜を育てつつ、山里に暮らす幸せを詠み続けて行くつもりです。  
気張らずに私の力で出来る作品を詠んでいこうと思っています。

◆今月の二人・小野節子作品評◆

七十歳半ばの青きかけろう

小野さんは、四国の丸亀市在住。七十歳半ばという年齢は、感慨深く過去へ向かわせるものようである。

・男気のありたる父の若き日を夫に重ねし青春時代  
男気のあった若き日の父は、小野さんにとって憧れの人だったのだろう。夫となった人には、その父を重ねたのだと、今になつて思い起される青春時代。

・父が好き母が苦手と思いしが年経ることに近づく心

父が好きで、母は苦手と思っていたのに、年をとることに苦手だったはずの母に心は近づいていくという。苦手と感じていた母のこともまた理解できる年齢になつたということ。作者にとっては、思いがけない発見であったかもしれない。

・その日まで母の慕いし父のこと女の業みせ狂いし時も

「その日」は、父か母、どちらかの死の日を言っているのだろう。永訣の「その日」まで、ずっと母は父のことを慕っていたのだ、と上の句。時には、女の業を見せて狂ったように見えた日もあつたけれど、その時だって母は父のことが好きだったのだ、と下の句。そういう母を今、理解できる「私」がいる。そうして、おそらくは、自らの傍らにいる夫へと心は向いていたにちがいない。

・人を知り教わることの多くありわれがわがの若かりし頃

・過去おもつことなどあまり無かりしに七十歳半ばの青きかけろう

齡を重ねた者の、素直な感慨の歌だ。「青きかけろう」は、悔いだけではない。美しくもある。

◆今月の二人・高橋光代作品評◆

昨夜の静い仕舞いこみ

評者：久我田鶴子

高橋さんは、千葉県鴨川市在住。鴨川と言つても、大山千枚田のある山里だという。

・野の花は季節違わず花咲かず酷寒の中にすみれ咲きいる

春には春の、夏には夏の、季節ごとの花を愛でながら山里暮らしうを楽しんでいる高橋さんである。

・初夏の夕昇り来る月待つ庭に忍冬の香風に乗り来る

初夏、夕月が昇るのを庭に待ちながら、ふと風に乗ってきたスイカズラの花の香に気づく。余裕のある歌で、情景が目に浮かぶようだ。

・容赦なくはびこる草に負けるなと野菜に言つか口に言つぱりと窺える。

・烟仕事に精出す身には、容赦なくはびこる草は敵のようなのだ。草取りをしながら「負けるな」と思わず声が出る。その後の下の句がいい。対句のリズムに、「負けない」心がきっぱりと窺える。

・ごめんねと言えず黙する鄙の家外はしんしん雪降りしきる

山里暮らしの冬。家中での静いの相手は、夫であったか。素直に「ごめんね」が言えず、黙ったまま。外を見ると、雪が音もなく降っていた。ちょっとできさきの場面のような気もあるが、次の歌こそが歌いたかったのかかもしれない。

・胸の中に昨夜の静い仕舞いこみ抹茶を点てて夫にすすめる  
前の歌につづく歌である。静いの相手は、やはり夫であったようだ。「ごめんね」の代わりに抹茶を点てると、「鄙には稀の」粋な計らいではないか。夫婦仲の良さは、収穫後の夫に「特上焼酎」を振る舞う歌にもよく出ている。

私と短歌との出会いを、気取ることなく振り返ると、ある社交ダンスのパーティの懇親会の席でのことである。これはわが町千葉県北東部の、東庄町の「シルバーダンス」という、どちらかと言うとシルバー、所謂、中年・老齢の会員のサークルであった。ご婦人の会員たちとダンスの合間に、飲んだり談笑したりしているとき私が、確か、妻の胡瓜や茄子の糠漬けのことを話す代わりに、何気なく五七五七のフレーズに組んで、書いて何人かの会員に見せたのである。そうしたら「あ、宇井さん、短歌会に入ったら?」というそんな言葉が返ってきた。このシルバーダンスのメンバーの中に、短歌結社「長流」の会員が何人かいて、「あら宇井さん、これだけ書ければ短歌をはじめない?」と言われたのが、そもそものはじまりなのである。

で、わが東庄町の文化協会に短歌会のサークルもあって、その時すでにその東庄短歌会が発足して二十年くらい経っていた頃であった。その東庄短歌会の中に「長流」の会員が四人、「歩道」の会員が一人いた。私が短歌について知っていることと言えば、俳句にあと七七をつけて「みそひと文字」にして書くということくらいの知識だけだった。

宇井 秀雄  
194

その当時、うなみ支社の支社長は石橋昭一郎先生で、そのほかに現支社長である小泉泰清さんも居られて、小泉さんには在職中から今まで六十年間お世話をうけた。

他のジャンルに目を向けるのだが、歌にまとめるまでにはなかなか絞れ来れない。まあ、気の向くままに、私は私なりに肩が解れるように詠んでることが意に適う、というところでしょうか。

何はともあれ、その「シルバーダンス」のパーティの時のひとつの話題が、私と短歌との出会いなのである。したがって短歌については、私はその年平成七年に東庄町の短歌会に入会したのが始まりなわけではありません。

その後、我が家隣の本家において、平成八年の正月に、本家の親戚である地中海うなみ支社員の故石毛敏雄さんに勧められた。私は、何を視点に詠むか、また、A欄の方は、視点をどう詠むか、ということに力を置いて詠んで頂きたい、とおしゃったことを記憶している。私は素養に乏しく、あれから二十年以上経った今も、歌の詠み方が地に足の着いたものではありません。周囲のある光景を見たとき、たとえば小糠雨の静寂の一瞬を「風のなき小雨に木々は静もりて零の当たる葉の動くのみ」、あるいは逆に滝のような大雨を見たとき「風のなき驟雨に打たる木々の葉の小刻みに揺る、不気味に見ゆる」――。

しかし、こんな光景に気がつくことは滅多になく、普段は何故か、家族のことが視覚や聴覚に飛び込んでくる。女孫、娘、息子、妻、果ては、息子たちが二階で飼っているミニチュアタイプのダックスフントまで。

地中海に入会してまもなくの頃、全国大会の全体会議の講演で、湾の会の佐久間辰先生が、着目の姿勢について、B・C欄の方は、何を視点に詠むか、また、A欄の方は、視点をどう詠むか、ということに力を置いて詠んで頂きたい、とおしゃったことを記憶している。私は素養に乏しく、あれから二十年以上経った今も、歌の詠み方が地に足の着いたものではありません。

ている次第です。

地中海に入会してまもなくの頃、全国大

会の全体会議の講演で、湾の会の佐久間辰

先生が、着目の姿勢について、B・C欄の

方は、何を視点に詠むか、また、A欄の

方は、視点をどう詠むか、ということに力

## 香川進小論

久我田鶴子

※「滄」第92号（2017・2）～第96号（2018・2）に五回にわたって発表したものをここに転載させていただいた。

### 1 はじまりの口語自由律

「昭和四年十一月二十八日午前、土岐善麿、斎藤茂吉、吉植庄亮諸君と、朝日新聞社旅客機コメツト型第一〇一号に搭乗、約二時間にわたつて飛ぶ」と詞書のある「空より展望する」の歌群から、前田夕暮の口語自由律による最初の歌集『水源地帯』は始まる。この昭和四年に、夕暮は「詩歌」を自由律へと転換させ、『水源地帯』の刊行は昭和七年だった。

初めて飛行機に搭乗した体験は、夕暮をして「久しい間私の内に内昂してゐた短歌形態に対する疑を、ひと時に吹き切つて仕舞つた。」と言わしめ、二時間後、即時に口を衝いて出た作

品として次の一首を挙げている。（『水源地帯』序）

ここにも醉うて母校の寮歌をさけぶ一群がる資本主義末期の深夜  
「所詮女だ」と別れて行つたが——彼はどこへ歩いてゆく  
のだ深夜街

自然がすんすん体のなかを通過する——山、山、山  
一千米の空で、頭がしいんとなる。真下を飛び去る山、山、  
山

さらに続けて、「私はこれでよいのだと思った。これこそ、私の生活感情を、最も端的に表現したものとして人にも示し得る、それが私の需めてゐた自由な形態であると表現あると信じた。」と述べている。夕暮はこの時までに既に三回の作風転換をおこなつていたが、この時の口語自由律への転換はそのいずれの場合よりも思い切つたものであった。

そして、この夕暮の動きに熱い視線を送っていた若者が神戸にいた。香川進、神戸商業大学（後の神戸大学経済学部）の学生であった。香川は『水源地帯』の刊行から間を置かず、唐木明夫の名で「前田夕暮歌集『水源地帯』の弁証法」（「神戸商大新聞」）を書いている。夕暮の、「果実のやうな新しい現実があり、虹のやうな詩的精神の昂揚と、朝空の機翼のやうな快適さがあり……時代のリズムが生き生きとして搏動してゐる」という言葉に強く共感したことでもあった。すぐにこの論は夕暮の目に留まり、唐木明夫（香川進）を「詩歌」に入れるようとにいう夕暮の発言に繋がつていった。大歌人・夕暮からの呼びかけは、どれほど若き香川を発憤させたことだろう。「詩歌」昭和八年二月号の「二月集」に九首、初めて香川の作品が掲載されている。当時のペネームは波川清、満年齢で二十二歳であつた。

「詩歌」に初めて掲載された九首中の三首である。

生まれ故郷の香川県多度津を出た香川は、神戸で意欲に満ちた学生生活を送っていたようだ。新聞部、雑誌部、絵画部、音楽部等のクラブ活動をし、ヘーゲル哲学研究会を創設。この研究会の講師には、後に獄死する戸坂潤もいた。マルクス主義への弾圧が激しくなる中、香川も警察に召喚され、しばらく身柄を拘束された。自由を奪われたこの時の体験は、身に沁みたようだ。その後の生き方にも少なからぬ影響を与えたにちがいない。

燃え上る火をじつと見て、同じ心だ、物言はなかつた  
決意！ と誰かが言つた。外套の襟をおし立てて黙つて坂  
を下つた

来た道の街路樹の青さがよきつてゐた、畳みかけてくる訊  
問をそらしながら――

これは、「詩歌」昭和八年十月号の作品十一首中の三首である。内容的には、訊問を受けている様子も窺える。そして注目すべきは、表現の鮮度、時代のリズムということを頭に置いた様々な試みである。この一首目と二首目は、やや変えられて、第一歌集『太陽のある風景』にも入れられている。

略年譜をたどると、昭和九年、大学卒業とともに三菱商事に入社。昭和十年一月、現役兵として入隊。昭和十三年一月、三

菱商事済津出張所（北鮮）へ転勤。七月、現地応召。八月の日ソ停戦協定後も引き続き寧歩兵連隊に勤務（歩兵少尉・中隊長）。昭和十五年、召集解除後、三菱商事東京本社へ帰属。そ

して、昭和十六年六月の第一歌集の刊行となる。満年齢三十一歳の誕生日を迎える直前であった。『太陽のある風景』は、香川進二十代の集大成とも言えるだろう。その歌集の巻末に、香川はこのように記している。

もともと短歌のごときは女子供のわざであり、をとこが身をうちこむに価するようなものではない、とふかく信じてゐたわたしが、急に変節して、歌をつくりはじめたのは「水源地帯」を見たときからである。私はそのときの感激を終生わすれえないであらう。じつに「水源地帯」はその鮮烈雄勁なる格調において当時二十三歳の学生であつた私を魅了し去つたのであつた。私は多くの友人といつしょに「水源地帯」から出発した。

## 2 第一歌集『太陽のある風景』

香川進の第一歌集『太陽のある風景』が出版されたのは、昭和十六年六月。箱入りB6変型判、総頁一七〇頁、序文に前田夕暮・米田雄郎、装幀は野口謙蔵、定価二円。いま見ても、紙質といい、印刷装本といい、堂々たる第一歌集である。

収められているのは、昭和八年から十五年（二十三歳から三十歳）までの「詩歌」に発表された口語自由律の作品四一二三首である。

燃えあがる火をじつとみつめ、おなじころだ、ものいはない

卷頭の歌は、「詩歌」昭和八年十月号掲載の「燃え上る火を  
じつと見て、同じ心だ、物言はなかつた」にいくらか手が加え  
られている。この大学時代の歌から始まり、会社、軍隊、会社、  
戦地、さらに会社と、香川は時代の流れの中で激しく身の置き  
場を変えながらも、常に意欲的に作品を作りつけた。  
中でも、北鮮清津に転勤後まもなくの、張鼓峰事件による現  
地応召、そのまま戦地に身を置いた二年余りの作品は、自ら  
「不抜の文学的信念ともいふべきものに到達したやうである。」  
と述べるほどの自信作であった。「停戦以後」と「太陽のある  
風景」とにまとめられた作品群である。

立上る、立上る、稜線に、鞍部に、みんな銃を差上げてる  
る、泣いてゐる  
（「停戦以後」）  
捧げ銃／ひとかたまりになる旗と人——しんかんと流れる  
夕焼ぞら

ばおんと、音がしさうな日輪をさへ、枯草、枯草、しい  
んと赤い  
（「太陽のある風景」）  
終日、地上をめぐる太陽を意識し、凍土のなかきびしい静  
けさにゐる

読点、感嘆符、ダッシュ等を使い、口語自由律ながらではの  
臨場感、迫力である。そして、凍てつく大地の厳しさを含め、  
スケールの大きな大陸の景を詠うことば、「男が身をうちこむ  
に足る」と思わせるものであったかもしれない。  
出版から間を置かず、「詩歌」（昭和十六年八月号）に批評号  
が組まれた。書いているのは、清水信・一條徹・嘉納とわ子・

### 丸山静・小関茂の五人。

一條は、「停戦以後」の作品を評価しつつも、渡辺直己の作  
品と比較して「思想性が表現をとぼして滲み出でこない」と述  
べ、学生時代からの香川をよく知る嘉納は、現在の日本人全体  
が動きもがいている「民族的激情」が香川を通して歌い上げら  
れていると見たい、としている。丸山は、香川の燃えるような  
情熱が白々しい、本音が聞けぬような気がする」と述べ、小関は、  
歌の意力の強さがもつプラス面とマイナス面を指摘し、「彼が  
達したといふ文学的信念とは何であるか、（略）彼が彼の意力  
に自ら敬意を表し、自ら屈服する様なものであつてはならぬ。」  
と述べている。

さらに、同じ号の「編輯後記」には、批評を書けと言われて  
も書かなかつた矢代東村の弁がある。香川の作品が強靭で迫力  
があるという定評に触れ、「どうして香川君にこの強靭性と迫  
力感といふ一面のみ取上げさせ、他の部分を見ないことにし、  
見ても故意に押しかけたかを考へて見るとい。勿論香川君  
の生活・性情・境遇といふものと、今の時代や社会といふもの  
を考慮に入れて」と述べている。そうしなければ突き進めな  
いほどの厳しい現実があつたにしても、香川が見ないことにし、  
見ても押し隠したことを、東村は見逃すわけにはいかなかつた  
のだろう。

雄蛙は雌蛙の背で眼をひらいてゐる、遠い軍歌、ひとつそり  
と陽のひかり

栗の実を折りとらうとさし伸べる腕のうらのあをい静脈を  
みてしまつた  
しづかに井戸は白い雲を喰べてゐる、はるかにかへつてき

たこの朝け

石のうへに赤い軍帽をおき、かれくさのなかわたしなに  
を語ればよい

前二首は北鮮に行く以前の歌、後の二首はそこからの「帰還の日に」より。このような歌も作った香川であった。だが、そうしたことが話題になる機会は急速に失わていった。昭和十六年、時代の歎車は容赦なく香川をも巻き込み、十月、丸亀歩兵第十二連隊に応召。十一月に結婚するも、十二月八日、太平洋戦争へと突入してゆく。

「詩歌」は、昭和十七年一月号に夕暮はじめ「大詔を拝して」と題する作品を掲載し、「大東亜戦争の完遂を祈る」という囲み記事まで載せ、一気に戦争色を強めてゆく。昭和四年以来の自由律も、やがて昭和十八年には定型復帰へ。口語自由律から出発した香川もまた、夕暮にしたがって定型へと移ってゆくことになるのである。

### 3 文語定型への転換

昭和十八年一月号の「詩歌」には、前田夕暮の「再出発の言葉」「新たなる使命」、さらには前年の十二月七日に行われた詩歌の会における講演記録「その前後」が掲載され、「詩歌」の定型復帰を示す号となっている。

夕暮は口語自由律の行き詰まりを定型復帰の理由として挙げているが、「私達は前線に征つて、戦争の実体を体験する代りに、戦争が私達に要請する逞しく新鮮なる詩精神を短歌に新し

く生かさねばならぬ。」と述べていることも見落とせない。その上で次のようにも述べる。

表現は作者各自のものである。私がかかる再出発をし、かかる作品を制作せずにをられぬ必然的契機を捉へたといつてそれを若い人々に強いやうとは決してするものではない。表現と形式とは全くその人その人のものであるからである。「新たなる使命」

定型復帰を強いるものではないという夕暮の言であるが、「詩歌」の多くの人々がこの一月号から定型歌を発表している。香川進もその一人であった。

山麓の草木のしげりはるかにして天皇の戦車は並みひかりたり  
絹をひろげいちづにレンズをみがきつゝ戦争の倫理を直観したり  
しんしんと野に鉄いきれするところ蝶々むらがり青天にのぼる

一月号には「戦車」十三首が掲載されているが、その中の三首である。

因みに、前月号（昭和十七年十二月号）には、その年の自選作品七首の掲載があり、次のような作品であった。

これで死ねますねと兵はいふ、これで死ねるこれで死ねる  
と兵とふたりでいふ

二階へあがりあさの海を見る、海をわたり、音楽のやうに花嫁はやつてくる

すでにしづかに梢は夕ぞらを流れ、妻がはこぶ紅茶のうつはの擦れあふおと

口語自由律から出発した香川進の、昭和十八年一月号からの変貌ぶりに驚かざるを得ない。まるで夕暮のかけ声ひとつで「詩歌」全体の定型復帰がなされ、香川もまたそれに従つたかのように見えるが、実際はどうだったのだろう。

その当時のことを『鑑賞 前田夕暮の秀歌』（昭和五十年十月刊）の中に、香川は次のように書いている。

……かつて、夕暮はなぜ口語自由律をはじめたのかと、當時同行のこころある大家を嘆かせたが、こんどは、なぜ再び定型をやるのかと、多くの自由律歌人を怒らせた。そのこえは憤りに近く、わたくしは交遊のあつた渡辺順三、清水信そのほかの歌人の言葉を、幾たびも聞かされた。白日社内にも大きい抵抗があった。

そして、その一例として近江極楽寺における米田雄郎と香川の対話（嘉納とわ同席）を紹介している。そこで雄郎は、「二人で独立しようか」と言ったという。「こころある大家」は、二度にもわたり夕暮の一八〇度の転換に振り回されることになったわけで、もうついでいけないと独立を考えたことも無理はない。口語自由律から出発して、それしか知らない香川にとっては、文語定型にせよと言われたことは歌をやめるかどうかの問題であった。ところがそこに夕暮から手紙がきたというのだ。

「一人で独立しようか」と言われた香川の雄郎に対する応えは、次のようにつづく。

（夕暮からの手紙の内容に「久我補足」）決して同感はしませんでした。ただ、作らずして定型歌を忌避するのもどうかともい、五、七、五、七と指折り数えながら、文語定型歌をつくってみました。ところが、「豈はからんや」実作の過程においては、定型の方が自由で、自分の言いたいことが言えるように型式がたすけてくれる。かえて自由律の方が窮屈で不自由なのでした。

文語定型歌を実際につくってみて、そちらの方がむしろ自分で自分の言いたいことが言えるという判断である。苦手な文法については、同じ部隊にいる井沢淳（東大国文科卒）らに見てもらうとまで言い、文語定型に転換する意志を明らかにしていく。前向きというのか、どんな場合にも主体的に考え行動しようとするのが香川の一貫した態度であった。それが、この時にも發揮されたと言うべきか。

同一月号の「詩歌」動静欄には、「米田雄郎 十二月二十日、大阪に於いて、詩歌再出発の会を開く、香川進遥々多度津より出席。」の記事がある。

「詩歌」が定型復帰した昭和十八年一月号から一年ほどの香川作品のタイトルと作品数は、次の通りである。

#### 4 未刊にして未完の歌集『構築』

- ・「戦車」十三首（一月号）
- ・「基地」二十三首（二月号）
- ・「炎天の訓話」十六首（三月号）
- ・「死体捜索」十六首（四月号）
- ・「基地にて」十二首（七月号）
- ・「蛙その他」十一首（八月号）
- ・「蒜山原」十四首（九月号）
- ・「防空基地」三十一首（十月号）
- ・「重爆の主脇」五首（十二月号・自選）
- ・「戦車其他」三十二首（昭和十九年一月号）

このうち、大作「防空基地」は、夕暮の推薦作品で、「編輯後記」に「この作品で彼は自己確立への第一歩を踏み出したやうだ。」という夕暮の言葉がある。

もう一つの大作「戦車其他」も推薦作品で、「香川君は病氣恢復、部隊長として闘魂旺盛、一氣にして『戦車其他』を作成して其気迫力を示し」と夕暮は書いている。昭和十八年十一月、九州行脚の帰途、夕暮は病氣療養中の香川を訪ね、一泊した。そこで香川は夕暮の激励を受けるが、その後に作られたのがこの大作であろう。

昭和十八年八月号には、かつて口語自由律で詠ったものを文語定型に変換したかに見える作品もある。

草のなかに太陽を仰ぐ女をみたまじまじと生きの悲しみをみた  
草のなか空仰ぎ見るまなざしは生きの悲しみたもちてゐたり  
（詩歌）昭和十八年八月号

戦車が、塞土をそぎてゆきし跡跡え跡えとして匂ふはなにか大きなる歯車を背にかつぎ兵はあゆめり冬空のもとを函のなかで抱きあつてゐる歯車にうつすら映れる冬の青ぞら白土地帯切り拓きたることにして蛇形交通壕の影は続けり枯草の中に眼をあけ見あげたる炎天の光りにおどろきにけり

「戦車其他」三十二首中の五首を挙げた。読点や「抱きあつ

てゐる」等の口語表現を残すが、文語定型と格闘している様子がうかがえる。だが、ここに詠われているのは、その当時、香川が置かれていた現実ではない。昭和十四年から十五年にかけて詠われた「太陽のある風景」に連なる世界である。「今、この時」ではなく、過去に取り組んだ題材に再挑戦しているのである。たとえば、五首目の作品などは「太陽のある風景」の次のような作品につながるものと言えるだろう。

枯草、日輪を忍ばせてくらい、あさの風来り——のぶとい牛のこゑ  
凍土を掘り、枯草を藉く、ひとりひとり、飢ゑた眼ざしを冬空にむけ

いことにし、見ても故意に押しかけたかを考へてみると、  
という言葉だ。東村のこの言葉に、どうにかして応えようとする  
思いが、会軍歩兵七五連隊にあって航空基地でノモンハン事  
変にかかりわり、兵火器や物資等の調達輸送を指揮した頃へと立  
ち返らせたのではなかつたか。

一つ一つ火爐を抱きて今し機はあけちかき地に並み潜まれ  
り  
〔詩歌〕昭和十八年二月号)

編隊はハルハをすぎる時刻にして高粱食にわがむかひをり  
巨きなる機影よぎりてゆくところ黄土に水は光りたりけり  
はろばろとくだりきたれる重爆の翼は燕麦の立穂を摺りたり  
〔詩歌〕昭和十八年七月号)

霧ふれるなか徐ろに離陸せる車輪つばらに黄土つけたり

黄土に光る水、燕麦の穂を摺る翼、離陸する車輪につく黄土  
などを見る目に、香川進がくつきりと立ち現れてくるようであ  
る。「定型の方が自由で、自分の言いたいことが言えるよう  
型式がたすけてくれる」と言ったことに嘘はなかつたのだ。

この後、「詩歌」昭和十九年八月号から十一月号まで五首ず  
つの作品掲載があり、「詩歌」は休刊になる。

香川は昭和十八年から二十年までの間、主任将校として、様々  
な本土作戦の防衛陣地の構築を仕事としながら、明治以来の写  
生歌から学び直し、文語定型の修練に励んだ。そのノートの一  
部は焼失したというが、それでも多くの作品が残されている。  
だが、この時期の作品を収める歌集『構築』は未刊のままで、  
未完のまま平成三年に刊行された『香川進全歌集』に収められ  
た。

## 5 戰後、独自の作風の確立に向けて

戰後、復員した香川進は三菱商事東京本社勤務となる。その  
三菱商事は、間もなく財閥解体の対象となるのであるが。

「詩歌」の復刊は、昭和二十一年七月号からで、昭和二十三  
年七・八月合併号までは福島県郡山市に発行所が置かれた。戰  
後復刊第一号は、表紙も本文と同じ配給のうす黒いさら紙のA  
5判二十八ページだったというが、国会図書館で現在みること  
ができるのは、復刊第二号の八月号からである。そこには「崩  
壊」と題された香川進作品七首が並ぶ。

しんかんたる花開きたり地に山に「びの静けさしみ究まれる  
巒曲せる太枝のしたに冷えこころ真冬のそらの光りきびしき  
花咲ける大樹の空をあゝ時がひびきをもちて過ぎてゆくなり  
となる「花もてる夏樹の上をああ『時』がじいんじいんと過ぎ  
てゆくなり」の原型が見られる。

戰後いち早く小田切秀雄・桑原武夫の短歌否定論が発表され、  
歌壇では昭和二十一年十二月、近藤芳美・宮松一・加藤克巳ら  
による新歌人集団の出発があった。白日社からは、前田透・香  
川進の二人がやや遅れてそこに加わった。

そして、「八雲」昭和二十三年一月号の、小野十三郎の「奴  
隸の韻律」—短歌と私。歌人たちはいっそう戯しい状況に置  
かれた。そんな中で、前田夕暮は「詩歌」昭和二十三年一・二

月合併号に、他の作品とともに、「わが肉体を通過したる自然」十四首を発表している。それは、「昭和四年秋旅客機搭乗自由律作品は今にして思へば表現不満である。で、以後逐次改訂作品を発表する。」というものだった。

かつてわが肉体を通過せし山々に辛夷花咲き春ならむとす  
肉体のなか通りつゝ響き鳴る日向の山の斜面の嵐

「自然がすんすんからだの中を通過する——山、山、山」に  
あつた新鮮な感動も、このように改訂された。夕暮自身による、  
かつて口語自由律に踏み切った作品の否定。それは、香川にとつ  
ては、師と仰ぐ人による、自らの出発点の否定にほかならず、  
短歌否定論以上の衝撃だったのではなかつたか。おそらく香川  
は、師に対して異を唱えたのだろう。同じ号の編輯後記に夕暮  
の次のようない言葉がある。

香川進はその精神に於いて処女歌集「太陽のある風景」に  
還るといふ。これは私の双手をあげて同感するところである。

ここには、夕暮の香川に対する気遣いのようなものも窺える。  
改訂作品はこの回のみで終わつたが、過去を振り返る夕暮のな  
かに、大きく揺らぐものを見せられた香川は、「『収穫』論」「  
源泉感覺論——『詩歌』の立場に関連して」「『詩歌』における  
創造的精神性」等の論を書くことで、「詩歌」(つまりは夕暮)が  
今までやつてきたことを評価し、その一方で欠けていたところ  
に思いを致し、新たな方向を探ろうとした。それは、老い衰え  
た夕暮を励ますことでもあつたろう。

自由律で出発した香川は、定型作品を発表しても歌壇では異  
端視されるところがあつたようで、「詩歌」昭和二十三年七・  
八月合併号の編輯後記には、次のような言葉がある。

・私は今年に入つてから始めて歌壇の人々と会ふやうな機  
会がかなりあつた。(中略) 定型の人と会ふのは始めてで  
あつた。そして、四、五人の知己を得たやうな氣もするが、  
失望する場合も甚だ多かつた。  
・そして、出来たらしつかりと自分を維持して作歌した方  
がよいと思つた。

東京に発行所を戻した「詩歌」は、昭和二十四年七月号から  
すべて夕暮の手による編集になり、夕暮は最後の力を振るうこと  
になる。その号の香川作品「鶴」三十一首より。

あかき鳥くだりて嬰ふ水の面にひとを殺めひらたくなして  
雪のなか還り来りて死にゆきぬ湯氣たて始むその濡れし衣が  
潮流にくろく見えるししかねが岸べにあたる弾のごとくに

内容は、ここでも戦争であった。夕暮は次の八月号で「詩歌」  
の青年性昂揚を言い、「永遠に青年性を喪失することなき詩こそ  
眞の詩である。未完成の美しさとはこの青年性にある。」と  
述べ、この香川作品については「異色ある作品だ。まるで鉄の  
鋭い断面を観るやうである。」と書いている。  
ここから、戦後の香川の確たる歩みがはじまつた。